

一柳右近可遊と伊勢国*

はじめに

本稿は、これまで筆者が行ってきた伊勢国文禄検地に関する実態説明作業の成果の一つである。筆者は、このテーマのもと、a「伊勢国文禄検地の基礎的研究」(徳川林政史研究所「研究紀要」昭和五七年度、一九八三年)、b「伊勢国文禄検地奉行一柳右近をめぐる一考察」(三重県総務部学事文書課編「三重県史研究」第二号、一九八六年)、c「伊勢国文禄検地に関する一考察——三重郡の検地を中心に——」(地方史研究協議会編「地方史研究」第二〇九号、一九八七年)、d「統一政権の成立と地域——伊勢国三重・鈴鹿郡境地域を例に——」(日本歴史学会編「日本歴史」第五三四号、一九九二年)の諸論稿において考察を行ってきた。

本稿との関連から、その要点をまとめるならば、①伊勢国文禄検地が、文禄三年(一五九四)七月から九月にかけて、豊臣秀吉が派遣した七名の検地奉行により、個別領主支配の違いをこえて、かなりの統一性をもって実施されたこと(前掲拙稿a、c)、②検地奉行の一人一柳右近が、これまで比定されてきた一柳直盛とは別人の一柳可遊であったこと(b)、③検地終了後、文禄三年九月二日から二月にかけていつせいに知行宛行が出されており、この検地が一国規模での知行割・知行宛行の前提としての意義をもったこと

(c、d)、④この検地により、町や村が公的・国家的地位を獲得したこと、すなわち、文禄検地とは豊臣権力が公権力・国家権力として行った伊勢一国町村の掌握作業であったこと(d)、の四点である。

本稿は、これらの点をふまえ、伊勢国内に領地を持ち、文禄検地奉行として伊勢国各地に足跡を残した一柳右近可遊をとりあげ、文禄検地前後の彼の活動と文禄検地が、このち近世の地域社会に与えた影響について若干の考察を行おうとするものである。

一 一柳可遊の領地支配

まず、一柳可遊の領地支配についてみていきたい。次の史料は、徳川林政史研究所所蔵の三重郡神田村(現三重郡菰野町神森、第1図参照)の年貢に関する一括史料の一部である。^①

〔史料1〕

A 年号之覚

一天正十一年

免状

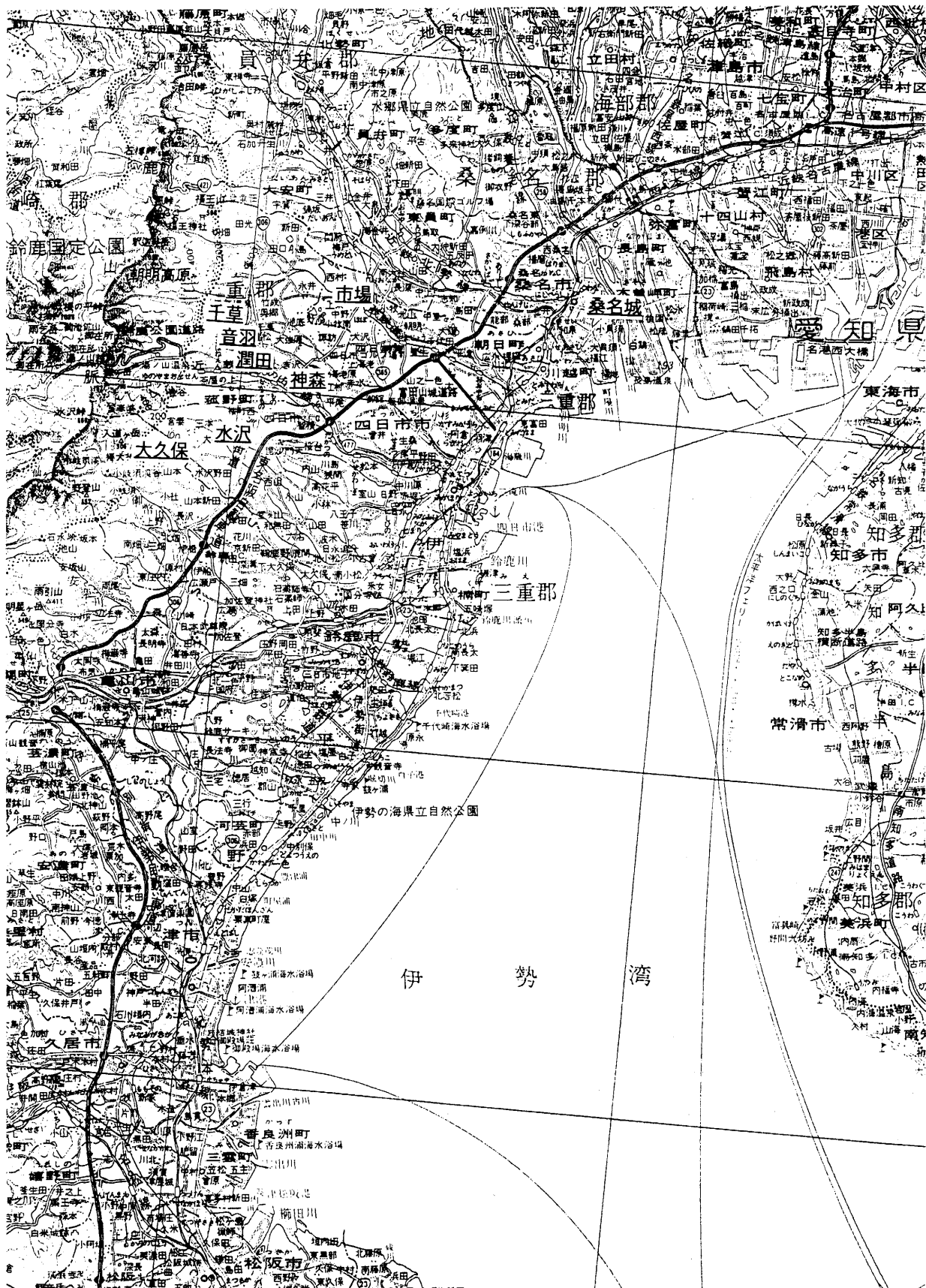
一文禄元年

一柳右近

右名寄帳有之候

大石 学
(歴史学)

第1図 三重県北部地図



『日本分県地図地名総覧』(人文社、1994年版)より

文祿三年八月十七日写

年号之覚

一寛永	三通	壹番
一正保	一通	貳番
一慶安	四通	三番
一承応	二通	四番
一明暦	三通	五番
一万治	三通	六番
一寛文	八通	七番
一延宝	六通	八番
一天和	三通	九番
一貞享	四通	拾番
一元禄	十五通	拾壹番
一宝永	七通	拾貳番
一正徳	五通	拾三番
一享保	拾八通	拾四番
一寛政	貳通	拾五番
一享和	無	拾六番
一文化	無	拾七番

已上

B 免状之定

一貳ツ九分也

右相定申上者急度上納可致候

(ママ)

天正十一申極月日

西河友方

山本久右衛門

(神) 田村

庄屋

百姓衆中_江

C 相定酉ノ年免状之事

一貳ツ七分者

神田村

右無相違急度御納所可仕者也、以上

寛永十年酉ノ霜月十七日

与兵次とのへ

南部新左衛門 (花押)
鈴木三郎右衛門 (花押)

D 定

一貳ツ九分

神田村

右之通当免相究候間、来ル霜月切ニ急度御皆済可仕者也

寛永拾九年

午拾月廿八日

水谷七左衛門_印

昌形 (花押)

神田村

庄屋

百姓中

E 申ノ歳免状之事

一貳ツ六分

神田村

右之通急度可致皆済者也、仍如件

寛永廿壹年_申

霜月廿一日

山中六郎兵衛_印

玄正 (花押)

神田村

庄屋・百姓中

F 免状

一三ツ五分

神田村

右戌之年免相如斯相究候間、来ル極月十日切ニ急度可致御納所者也

正保三年

十一月十一日

山中六郎兵衛_印

玄正 (花押)

神田村

庄屋・百姓中

(以下略)

A、Fを通して、近世の文化年間(一八〇四～一八)以降のある時点で、神田村史料の整理・目録化作業がおこなわれ、Aの目録が作成され、これに対応するB以下の年貢免状が一括されたことがうかがえる。C、Fは菰野藩の役人が発給した年貢免状である。

これら一連の史料で注目したいのは、Aの「天正十一年 免状」にあたるBの「免状之定」である。Bの発給者である西河友方と山本久右衛門は、伊勢国内の他地域に残されている文禄三年の検地帳から一柳可遊配下の検地役人であることが確認される。すなわち、この時期、一柳可遊が配下の西河らに神田村の年貢率を定めさせていたことが知られるのである。また、このとき定められた二ツ九分という年貢率は、別表にみられるように、C、Fを含む以後の時期の一つの基準となっていることもうかがえる。

なお、Aには文禄元年に作成され、文禄三年八月一七日に写されたという一柳可遊の名の記された名寄帳が存在していたことが記されているが、文禄元年は文禄三年の誤りと思われる。文禄三年八月一七日は文禄検地が行われた時期に一致し、また昭和十五年(一九四〇)ころ菰野町大字神田に残っていた文禄検地帳の写しに「文禄三年八月十七日、伊勢国三重郡神田村、一柳右近内西川友方、山本久右衛門」と記されていたという『菰野町史』の記述などから、Aの名寄帳とは文禄検地帳(あるいはこれをもとにした名寄帳)の写しであったと推測される。一柳可遊が文禄検地當時に神田村の領主であったかどうかは、あらためて検討されなくてはならないが、先のBの記述からこれ以前(天正期)に、一柳可遊が神田村の領主であったことは、ほぼ間違いないところであろう。

別表 三重郡神田村の年貢率の推移

天正11 (1583)	2ツ9分	寛文3 (1663)	4ツ4分5厘
寛永10 (1633)	2ツ7分	4 (1664)	4ツ6分5厘
19 (1642)	2ツ9分	5 (1655)	4ツ8分5厘
20 (1643)	2ツ6分	6 (1666)	4ツ7分
正保3 (1646)	3ツ5分	7 (1667)	4ツ3分
慶安元 (1648)	4ツ1分	8 (1668)	4ツ5分
3 (1650)	1ツ5分	9 (1669)	4ツ3分 「土免」
4 (1651)	2ツ6分	10 (1671)	
5 (1652)	2ツ6分	11 (1671)	
承応2 (1653)	2ツ9分	12 (1672)	4ツ5分
3 (1654)	3ツ	延宝元 (1673)	4ツ6分
明暦元 (1655)	2ツ8分	2 (1674)	4ツ4分5厘 「定免」
2 (1656)	4ツ	3 (1675)	
3 (1657)	4ツ4分	4 (1676)	
万治元 (1658)	3ツ9分	5 (1677)	4ツ5分5厘
2 (1659)	4ツ1分	6 (1678)	4ツ6分
3 (1660)	3ツ1分5厘	7 (1679)	4ツ6分5厘
4 (1661)	3ツ8分	8 (1680)	3ツ9分

(徳川林政史研究所神田村文書より作成)

一柳可遊が三重郡内の領主であった痕跡は他にもある。次の〔史料2〕は、伊賀上野の城代を勤めた藤堂元甫と、その遺志を継いだ子の元福が、宝暦一〇年(一七六〇)から同一三年にかけて編纂した伊勢・伊賀・志摩三国の地誌『三国地誌』に収録されている史料である。

〔史料2〕

A 一大樹寺居住之事

一 山林竹木之事

一 樹木之事

右旨無諸役令寄進者也、仍免許如件

天正十五年丁卯月十九日 丹羽勘助

氏次在判

保々大樹寺

B 一当寺中居屋敷之事

一山林竹木之事

一樹木之事 附茶蓮

右旨無諸役令寄進者也、仍免許如件

天正拾九年八月日 一柳右近在判

保々大樹寺

A・Bともに、三重郡市場村（現四日市市、第1図参照）の大樹寺にあてた安堵状である。大樹寺は、臨濟宗妙心寺派の寺院で、宝徳年間（一四四九～五二年）に朝明郡保々城主朝倉氏の招請によって創建され、同氏の菩提寺となっていた。Aの発給者の丹羽勘助氏は織田信雄の家臣であったが、一時徳川家康に属し天正一二年の小牧長久手の合戦当時は尾張国岩崎城主であった。のち再び信雄に仕え伊勢国内で七〇〇石を支配したとされ、市場村を支配したのはこの時と考えられる。安堵の内容は、境内敷地と山林竹木の安堵、および諸役免除となっている。

Bは一柳可遊が大樹寺に与えた安堵状である。内容は丹羽氏次とほぼ同じであり、可遊が領主としてあらためて同寺の特権を保証したことがわかる。

次の史料も、同じく一柳可遊が三重郡内に領地をもっていたことを記したものである。これは、三重郡千草村（現菰野町、第1図参照）の庄屋を勤めた辻家の文書のうちの寛永一四年（一六三七）におきた三重郡の潤田（壬田）村・千草村・音羽村の三郷（いずれも現菰野町、第1図参照）の山野争論に関する訴状である⁽⁶⁾。

〔史料3〕

壬田村百姓等乍恐申上候事

一壬田村・千草村・音羽村右三郷者先年々々郷ニ而御座候故、井水山野ニ堺

者無御座候、中ニも壬田村ハ本郷ニ而御座候故、先年々々山野之出入ニも壬田村が取持相済申候処ニ只今千草村がうる田をも山野江入不申、迷惑仕候御事

一三郷之山野ニさかいも無御座候故ハ、壬田村と吉沢村之さかいめニ吉沢村が牛馬をはなし申ニ付、吉沢村が壬田村へ野酒くれ候を、是も千草衆・音羽衆等所ニ壬田村ニ而たへ申候御事

一壬田村・千草村・音羽村三郷たち相の草野へ、千草村が新法を仕郷中へたて、菰里下之北野と申村、草野へ入申付而、壬田村がとかまを取申候へハ、千草村が我かま、いたし、壬田村之とかまを取申、本郷のうる田村を者草野までとめ申、迷惑仕候御事

一隠岐守様御代ニ、千草村この村と山野之出入御座候時も、この村と壬田村者同御給人にて御座候付、御公儀へ罷出候事迷惑存候へ共、千草村と菰郷之儀ニ御座候へハ、御給人様の御前如何と存候へ共、千草村と同前ニ御奉行所江言上仕候御事

一一柳右近殿御代ニ、鳥井戸山の出入御座候へ共、こ、も壬田村が取持相済申候事

右之旨被聞召合、如前々山野ニさかいハ無御座候間、被仰付可被下候、以上

（寛永一四年）

丑ノ七月日

壬田村惣百姓中

（松平定綱カ）

越中守様御内

高橋□右衛門様

伊藤三郎左門様

これによれば、潤田村は三郷の本郷であり、三郷は山野を入り会って使用していたが、千草村が新法をたて潤田村の使用を制限したため、この訴訟をおこした。かつて隠岐守（桑名藩主松平定行^{さだゆき}）時代にも千草村と菰野村の出入りがあり、このときは、潤田村が一郷の縁をもつて千草村と共に奉行所に訴訟している。ここで注目したいのは、最後の箇条に一柳右近の時代に鳥井戸山（鳥居道山^{とりいどう}）において出入りがあり、このときは潤田村がこれを扱ったとする記述である。潤田村が、かつて一柳可遊の領地であったことが知られ

るのである。

さらに次の史料も、一柳可遊が三重郡内に領地をもっていたことを記している。

〔史料4〕

一大久保村之事、天正十三稔より以来、川南之水沢山之山手銭出し不申山を取申候、草野田地之儀ハ同十七年に水沢野田村立ち申之間、此新村如前々無相違入合也、水沢村之儀天正十四年より天野周防守殿、同十八年に岡本下野守殿、同十九年に一柳右近殿被召置、右之御仕置無異儀之処に、天正廿年に田中兵部少殿水沢村御取被成、初知入之時水沢山手銭六貫五百文之内大久保村より三貫三百文出之処に、近年出し不申之由水沢村より目録仕候而、大久保村より御取可被成之間、御取被成可然と水沢村より申之、公事を作り申候也

これは、三重郡の水沢野田村（現四日市市）の庄屋を勤めた黒田家の文書うちの正保二年（一六四五年）六月二四日「水沢野田村由緒之一巻」からの引用である。^⑦

内容は、三重郡水沢村（現四日市市）と鈴鹿郡大久保村（現鈴鹿市）との間の山手銭支払いをめぐる争論に関する記事である。この中に天正一九年から翌二〇年の間、一柳可遊が水沢村の領主であったことが記されている。可遊はそれまでの領主と同様大久保村の水沢山への入会を認めたが、可遊の後の領主田中吉政が、当時岡本下野守良勝の領地であった大久保村にも負担を求めたことから紛争がおこったと記されている。天正一九年から五四年のちに成立した由緒書であり、今後さらに検討を加えなくてはならないが、一柳可遊が水沢村の領主であったことが記されていることは注目される。

以上、「史料1」～「史料4」は、写しや訴訟、由緒書などの史料ではあるが、それぞれ一柳可遊が天正期に三重郡内に領地をもっていたことは共通している。

その後、文禄検地当時、一柳可遊が桑名城主であったことは、「古屋草紙」の「桑名市中、文禄二年、一柳右近大夫今城築ク」や、「公私爪録」の「文禄年中、桑名城郭ヲ築ク、一柳右近大夫守護」や、「豊太閤、文禄検地沙汰文、

完」の「北伊勢くわなに被置候、一柳右近丞」という記述などからうかがえる。また、検地直後の文禄三年九月頃に可遊が伊勢国内に一万九百五十五石余の領地を支配していたことは、「いせの国御蔵入給人のもくろく」の「一柳右近分、本帳高合一万四千九百七拾九石七斗八升、出来合四千四百六拾石四斗七升、小成物合百五拾五石四斗八升、都合壹万九千五百九拾五石七斗三升」という記述によって知られる。^⑩

以上のように、一柳可遊が天正期に三重郡内に領地を持っていたことがうかがえるとともに、文禄検地直後にも桑名城主として伊勢国内で一万九百五十五石余の領地を支配していたことが確認されるのである。

二 一柳可遊と水主動員

しかし、一柳可遊と伊勢国との関係は、彼の領主としての側面のみならず、豊臣官僚としての側面においてもみられた。たとえば、文禄期、可遊は豊臣秀吉の朝鮮出兵とかかわって伊勢国内の諸浦からの水主動員をおこなっている。文禄元年（一五九二）三月一三日の秀吉の朝鮮出兵計画の「各地ノ舟奉行」のなかに「壹岐、舟奉行、一柳右近大夫」の記述があるが（拙稿^⑪）、以下に掲げる四日市町堅町の庄屋と廻船方年寄を勤めた井島家の文書（四日市市立博物館所蔵井島文庫文書）の中の「廻船方御由緒書」にも水主動員に関する記述がみられる。^⑪

〔史料5〕

伊勢国拾三ヶ浦

長島 大島 桑名 四日市 楠 長太 若松 別保 栗真 白子

白塚 津 松力崎

高麗御陣之節、右拾三ヶ浦江当所々水主割仕候

当所出方左之通

御奉行白子与次右衛門様船三乗

一文録元辰年

水主拾三人

右御同人様

一同 式巳年

同 拾三人

御奉行一柳左近様・堀尾帯刀様船ニ乗

一同 三千年 同 拾三人

右御同人様

一同 四未年 同 拾五人

御奉行九鬼大隅守様大坂廻り

一慶長元申年 同 拾五人

右御同人様

一同 二酉年 同 拾五人

右御同人様

一同 三戌年 同 拾五人

右七ヶ年之内、後四年ハ高麗水主御免、大坂迄之水主差出申候、志州鳥羽

御城主九鬼大隅守様船ニ乗申候、右船役之儀難儀ニ付、乍恐 権現様々九

鬼大隅守様江御頼之御書被遣候、本紙者濃州関町ニ有之、左之通

四日市場舟役之儀、從阿部伊与守申入候之処、懇切之御返事披見令

祝着候、何様面談之節可申述候、恐々謹言

九月十五日

家 康

御書御判

九鬼大隅守殿

これは、寛政一二年（一八〇〇）五月に、四日市の廻船年寄源三郎が、浦方見分として四日市宿に來た幕府勘定組頭の岸彦十郎（雅法）と普請役取締の石川勘太夫に提出した、「廻船方由緒書」の下書の一部である。ここには、①四日市が朝鮮出兵にさいして、長島から松ヶ崎に及ぶ伊勢国の一三の浦水主を割り付けたこと、②四日市の水主は文禄元年と二年は奉行白子与治右衛門の船に乗り、三年と四年は奉行一柳可遊と堀尾吉晴の船に乗ったこと、③しかし、文禄四年以後四日市場の高麗水主が免除となり、当時四日市場の領主となった徳川家康の頼みにより、四日市場の水主は、志摩の鳥羽城主九鬼嘉隆の船で大坂迄行くことになったこと、などが記されている。このうち、③の変化については、文禄四年七月に可遊が秀次事件に連座して家康に預けられ切腹させられている（拙稿b）ことから、この一件とかかわるものとみられる。

以上のように、文禄期一柳可遊は、朝鮮出兵にかかわって、奉行として四日市場から水主人足を動員していたのであった。

三 一柳可遊と文禄検地

さて、一柳可遊が、伊勢国文禄検地の検地奉行をつとめたことは、すでに述べたところである。本節では、一柳可遊に関連する史料をとおして、文禄検地が近世における伊勢国内の地域社会に与えた影響についてみていきたい。

1 職人（轆師）の由緒と関連して

まず、度会郡における一柳可遊の検地の影響についてみてみたい。⁽¹²⁾同郡柏野村小倉家文書の享保二年（元文元年、一七三六）写の「覚」には次のような記述がみられる。

〔史料6〕

覚

一 木屋方轆師先祖ハ江州君ヶ畑惟喬親王御家筋ニテ御座候、四百九拾六年以前承久式年轆師の職を申請、大蔵卿惟仲・民部卿頼定・藤原定勝右御三人様より轆師巻物を小椋助之丞頂戴仕江州君ヶ畑より罷越、勢州田丸御領分大内山谷注連小路木屋・笠木木屋・錦木屋右三木屋江居宅を備へ方々にて山稼仕久舗渡世を送り、其上上様江山御願申上御奉書折紙段々頂戴仕所持仕候

一百四拾五六年以前元亀元年十二月九日宮川を限り南之山右木屋方之者勝手ニ仕候様にと包房卿様より東殿ニ当テ所御座候御奉書頂戴仕罷在候

一百三十三四年計以前天正三年七月晦日右之山々無相違他所より彼山江入申候得共、轆師中として相押へ申様にと諏忠弘卿様・勝田右馬亮殿江と当て所御座候御奉書所持仕候

（以下略）

すなわち、小倉家は近江国君ヶ畑にいた惟喬親王の家筋にあたり、承久二

年(一二二〇)に轆師の職を認められた。轆師は木地師ともよばれ、山間に住んで椀や盆などの木工品を作る職人である。右の記述によれば、轆師たちは、度会郡柏野村の注連小路木屋、崎村の笠木屋、錦木屋(いずれも現紀勢町、第2図参照)に居宅を構え、山稼ぎをおこなった。元龜元年(二五七〇)には、宮川の南方の山々での自由な仕事を許可され、天正三年(二五七五)にはこれらの山々での独占的な活動が保証されたとしている。

一般に、轆師は自分たちの特権を主張するために、皇室などとのつながり(由緒)を強調したが、この記述もまた同様のものとなっている。注連小路木屋の小倉家は、崎村の大皇神社を開き、近世中期以後は柏野村の庄屋を勤めるなど、地域社会の中心的存在であった。

次の〔史料7〕～〔史料12〕は、この地域を含む三瀬谷の轆師に関する文書である。〔史料7〕～〔史料10〕は後世に作成された文書であるが、以下、これらの文書を参考に、文禄検地が近世社会においてどのような意味をもったのか、具体的にみていくことにしたい。

〔史料7〕

三瀬谷口クロ師申分先規之通無相違諸事可守御国御法度事專雖為勿論公儀御用木等一切不可伐候、任御検地之高可出公務候、然而新儀之板師不可入之者也、如任先規之旨状如件

文禄二年二月廿日

駒井中務

勢州度合郡三瀬谷口クロ師申

中井助蔵

〔史料8〕

三瀬谷之内口クロ師田畑年貢米之儀依為検地帳面外、去年も岡本下野為代官米五石之通出運上由(中略)山田畑之儀□□斗に任し申候墨付可遣者也

十月廿六日

駒井務輔

松坂助蔵

にしき木屋与助

かさ木木屋新兵衛

〔史料7〕、〔史料8〕とも豊臣秀次の側近で右筆を務めた駒井中務少輔重勝の名がみえる。すでに天正期から地域の轆師の独占的な営業が認められていたとする主張を受けて、〔史料7〕は新規の轆師の参入を禁止し、〔史料8〕は轆師が、田畑年貢米は検地帳面外であるとし、代わりに五石を代官の岡本良勝に納めていたことが記されている。

〔史料9〕は、これらに続き、文禄検地のさいに検地奉行の一柳可遊が、三瀬谷四か所の轆師中に示したものとされる。

〔史料9〕

三瀬谷之内四ヶ所、轆師之木屋・居屋敷納方之儀、如前々令用捨候、雖然今度御検地之上候条、轆師為年貢米八石分御代官・御給人相定次第、急度納所可仕候、其外違乱有間敷者也

文禄三年

一柳右近

七月十六日

中井助蔵

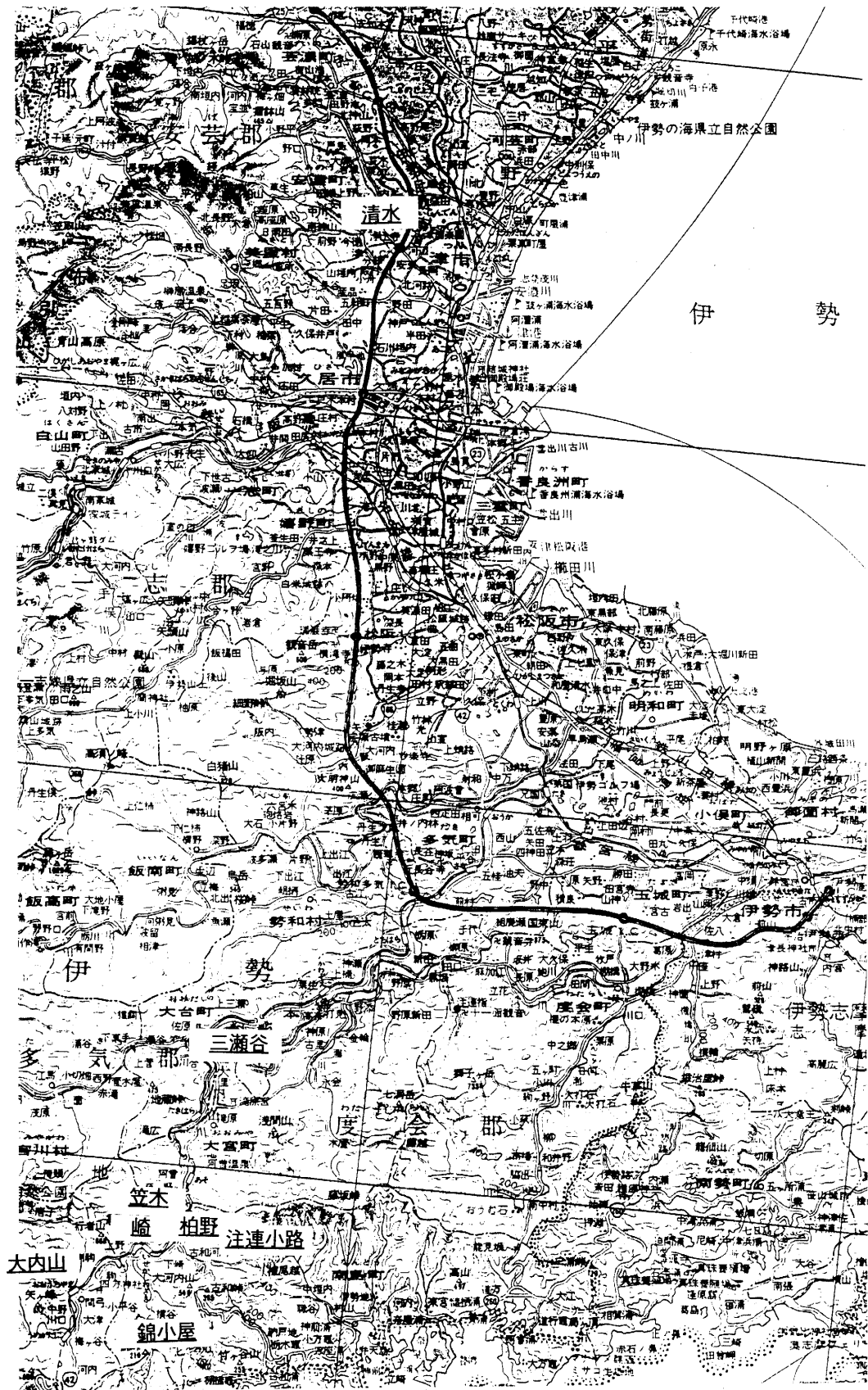
笠木新兵衛

すなわち、可遊は三瀬谷中の四か所の轆師に、木屋・屋敷は従来通り除地とするが、轆師年貢として米八石を納めるよう指示している。ここで注目したいのは、(1)文禄検地が職人からの年貢徴収を公的に確認する機会とされていること、(2)検地後、三瀬谷を支配する代官・給人などが任命されることが轆師たちに告げられていることである。

一柳可遊がこの地域において検地をおこなったことは、(1)文禄三年七月八日付の「渡会郡大内山村御検地帳」に、検地役人として「一柳右近内、山本仁右衛門、長谷川権右衛門、山本久右衛門、前沢庄助」の記載があること、(2)同七月九日付の「渡会郡崎村」の検地帳にも「(一柳右近内) 山本忠左衛門、桑原平四郎、大西七右衛門、長谷川五兵衛」の記載があること、さらに(3)同八月一日付の「御検地帳、柏野村」にも「一柳右近内山本久右衛門」の記載があることなどから確認される(第2図参照)。¹⁵⁾〔史料7〕～〔史料9〕は、後世こうした状況をふまえて作成されたものと考えられる。

次の史料は、文禄検地直後の一〇月二二日の日付があるものである。¹⁶⁾

第2図 三重県南部地図



『日本分県地図地名総覧』（人文社、1994年版）より

〔史料10〕

南村山えきぢ引之儀如先申付候間、無相違山年貢可被納所候、他所より新儀に入候者有之候へば此折紙を以相留可申候、右之村々したくをかまへ荒地などおこし候もの諸役をゆるし可申者也

文三十月廿二日

吉田弥三九衛門尉

きぢ引新兵衛殿

発給人の吉田弥三九衛門尉については不明であるが、宛名は崎村の笠木木屋のきぢ引新兵衛となっている。ここでは、山年貢の納入と新規の轆師の移住禁止、および荒地を起こした場合の諸役免許が記されている。

以下の〔史料11〕、〔史料12〕も、可遊が定めた年貢定米に関するものである。

〔史料11〕

奉願候御事

(第1条)

一文禄二年之時分三木屋屋敷方御年貢定米五石上納仕候、同文禄三年一柳右近様より定米八石と御定被為成被下、笠木新兵衛三十五年庄屋仕り御納所上納仕候、次々錦木屋与助と申者二十九年庄屋仕り御納所上納仕候

(第2条)

一寛永二年之時分原田伊右衛門様三木屋八石を十五石に御定被下其時分注連小路馬之助ト申者庄屋仕り、二十三年程御納所御宜上取立勘定相勤申候、次々長助庄屋仕り御納所相勤申候云々、貞享三年ノ時分山之御願ノ儀に付庄屋あやまり御座候に付、柏野村・崎村両村庄屋殿ニ御預被下御支配請申候へ共不手廻しニ而勝手悪敷儀御座候而難儀仕候御事

(中略)

いの十二月十七日

しめ小路組頭 作右衛門

にしき木屋組頭 半助

かさぎ木屋組頭 与吉

堤文左衛門殿 (17)

これは、三つの木屋の組頭がこの地域を管轄する大庄屋の堤文左衛門に出した願書の一部である。成立年代は、元禄八年(一六九五)と推定されている。¹⁸⁾ 第1条では、(1)文禄三年に一柳可遊が定米を八石と定めて以後、笠木木屋の新兵衛が(寛永六年まで)三五年間庄屋を勤めこれを納入してきたこと、(2)つづいて、錦木屋の与助が(万治元年まで)二九年年間庄屋を勤め同じく定米八石を納入してきたこと、が記されている。

第2条では、(1)寛永二年頃に田丸藩代官の原田伊右衛門が定米八石を一五石とし、以後注連小路木屋の馬之助が慶安元年まで庄屋を勤め、この間二三年程定米を納めてきたこと、(2)その後注連小路木屋の長助が貞享三年(一六八六)まで庄屋を勤め、同じく定米を納めてきたこと、(3)しかし、貞享三年の山野争論のさいに注連小路の庄屋に誤りがあり、柏野村と崎村の庄屋に預けられ、三つの木屋は彼らの支配をうけるようになったこと、が記されている。三つの木屋の組頭たちは、庄屋がいなかったために、さまざまな困難が生じているとして、あらためて三つの木屋の中から庄屋を任命してほしいと願ったのである。

第1条では寛永六年まで年貢定米が八石であったとしながら、第2条では寛永二年頃に原田伊右衛門が定米八石を一五石としたとされるなど不明確な部分もみられるが、文禄検地のさいに検地奉行の一柳可遊が定めた年貢定米が、三つの木屋のその後の負担の基準となったことが記されている。

〔史料12〕

(第8条)

一百二十二年計以前文禄三年七月十六日二一柳右近様より木屋方の内注連小路木屋中井助蔵・笠木木屋新兵衛方江被遣候御証文にはロク口師居屋鋪如前々令用捨御検地ノ上ロク口師年貢米八石納所可仕被仰付候、御証文所持仕右定米八石之御納所六十七八年計右三木屋より御上納相勤申候

(第11条)

一寛永二年酉ノ年原田伊右衛門様御代官の御時分注連小路木屋・笠木木

屋・錦木屋より定米十五石づゝ上納仕候様にと被仰付、延宝七未ノ年迄右之定米上納仕候処、延宝八年申ノ年神谷与一兵衛様御郡役之御時分、新田森平之御検地被遊三木屋定米ノ場所をも御検地被遊

高 三十九石三斗三升五合 注連小路木屋

高 三十九石一斗八升二合 笠木木屋

高 五十九石九斗九升二合 錦小屋

都合高百三十八石五斗九合

右之通年々御免定ノ次第御貢上納仕十五石之定米ハ相止メ上納不仕候

正徳五年未七月

右ハ木屋方江州君ヶ畑より勢州領証文頂戴之年号付三木屋新田検地之次

第如期之候

享保廿一年写之 小掠宇兵衛¹⁹

これは、先の「史料6」「覚」の続きの部分である。ここでも、文禄三年に一柳可遊により年貢定米八石が決められたこと、寛永二年にこれが一五石になったことが記されている。先の「史料9」とあわせて、文禄検地のさいに一柳可遊が定めた年貢定米が、その後も年貢賦課の基準になっていたことが知られる。

以上、小倉家文書の検討から、(1)一柳可遊による文禄検地が驍炬師の特権・由緒の根拠となる年貢負担の契機として認識されていたこと、(2)同じく文禄検地が、三瀬谷を支配する代官・給人などの変更の前提として行われたものと認識されていたこと、(3)さらに、このとき定められた年貢定米が、後々まで負担の基準となったこと、などの点が確認された。

2 〔補論〕^{もじや} 緦屋の由緒と関連して

前節では、一柳可遊による文禄検地が近世の地域社会にも影響を与えていたことを指摘したが、本節では補論として、安濃郡清水村（現安濃町、第2図参照）の緦屋職人の由緒に関する史料をみておきたい。²⁰ 緦とは、麻糸をもじって目をあらく織った布で、夏衣や蚊帳などに用いる素材である。

〔史料13〕

（表紙）

A 一 覚

八町壹丁目

太兵衛

（第1条）

一正徳三巳年七月 私方義清水村緦職同株ニ相違無御座段為永世之則、御役所様江右清水村緦職之者共々連名を以奉願上候口上書之趣、左之通ニ控所持仕候

乍恐御願申上候

（第1条）

一清水村緦屋共之義大閣様御検地御帳面ニ壹石九斗貳升緦屋年貢仲ヶ間々上納仕、其後平高ニ被為遊候節、四石八斗代ニ改り是迄上納仕候、依之同村ニ而も緦屋筋目外者往古々々老人茂緦職為致不申候、縦緦屋仲間之内不勝手ニ罷成緦職得不仕候者御座候而も、以後緦職可仕ため年々少々宛右御年貢之内ヲ出申候、尤仲ヶ間之人数減少仕候而も、相残候者共々右之御年貢無相違相務来申候（以下略） （正徳三年七月、「緦職につき願書写」）

B

（第2条）

一文録三年八月五日、羽柴下総守様御検地之節、緦屋共御年貢として高四石八斗代被為仰付候ニ付、緦屋共永々之儀ニ御座候間、御年貢御捨免被遊被下候様ニ御願申上候所、緦職之儀者他村ニ茂無之、殊ニ他国ニ而茂不致珍敷緦職ニ候へ者、由緒ニ茂成候間、御年貢相勤候様ニ被為仰付奉畏、其節々于今上納相勤来申候、此由緒を以同村ニ而茂此筋目之外ニ緦子職不仕候様ニ、先年々相定り居申新法ニ緦職不仕候（以下略） （享保一七年一〇月「乍恐以口上書奉願上候」）

C

（第2条）

一文録三年八月五日、羽柴下総守様御検地之節、緦子屋共地面無之高四石八斗代御年貢として被為仰付候ニ付、緦屋共永々之儀ニ御座候間、御年貢

御捨免被遊被下候様御願申上候所、緞職之儀者他村ニ而も無之、殊ニ他国ニ而不致珍敷緞職ニ候得ハ、由緒ニも相成候間、御年貢相勤候様被為仰付奉畏、其節ニ于今上納相勤来申候、此由緒を以同村ニ而茂此筋目之外ニ緞職不仕候様ニ先年ニ相定り居、新規緞職不仕候(以下略)

(享保一七年二月十九日「乍恐口上」)

D 清水村緞子屋共往古ニ奉蒙御免許歴代緞子屋職家業仕罷在候、御国産之品ニ而文録三年御改無地高四石八斗、緞子職之者共御年貢上納仕来候、依之御領下ニ而右緞株之外緞子職企候儀相成不申候御定ニ有之候処、紛敷仕形共出来候ニ付、元録享保年間御訴申上候所御許容被為成下、染張等紺屋共へ詔来り有之候ハ、緞屋共江染張り印を乞請候上ニ而可仕様被為仰付、猶又私共へ茂張見届印形之義無差支可致遣、若加印無之品染候ハ、見付次第可申出様被為仰付被下難有奉存候(略)

一(略)申上候^茂奉恐入候得共、文録年中ニ以来式百五拾年御年貢上納仕居候職株之者共ニ而、先規之通往々相続家業仕度奉存候、右之趣急度御聞濟被為成下候様偏ニ奉願上候、以上

(天保一三年二月「乍恐御訴奉申上候口上」)

E

一(第1条) 清水村緞屋共往古ニ奉蒙御免許歴代緞屋職家業仕罷在候、御国産之品ニ而文録三年御改無地高四石八斗、緞職之者共御年貢上納仕来候、依之御領下ニ而右緞株之外緞職企候儀相成不申候御定ニ有之候(略)

(弘化三年七月「手覚」)

F

一(第2条) 文録三年八月五日羽柴下総守様御候地之節、無地御高四石八斗代御年貢として被為仰付ニ付、永々之義ニ御座候間右御年貢御赦免御願申上候所、緞職之義者他村ニも無御座、殊ニ他国ニ而も不致珍敷緞職ニ候得者由緒ニも相成候間、御年貢相勤候様被為仰付奉畏、其節ニ于今上納相勤来候(略)

(第4条)

一(略) 文録年中ニ式百七十年来于今御年貢上納仕来候中ニも、数代休職

仕居難渋罷在候ものも、後代若緞職相始可申節、一ヶ年ニ而も上納中絶仕居候而者、其節同職相成不申定ニ付、于今相続少々ツ、ニ而も差出し居候程之義ニ而、累代職株之趣意も相立不申、甚以難渋仕罷在候間、無拠右之段御歎願申上候(略)

(万延元年八月「乍恐奉願口上之覚」)

G

一(略) 尚亦殊ニ緞株之義者、文録三年八月五日羽柴下総守様御候地之節、他国他村ニも無之珍敷緞職之義ニ付由緒共相成候間、御年貢として四石八斗差上候様被仰付、今ニ式百七十余ヶ年来株式御年貢として上納仕来罷在候(略)

(慶応元年一〇月「乍恐奉願口上之覚」)

これらの史料は、近世の中後期に、清水村の緞屋職人が独占的な営業権を侵害されそうになったさい、由緒を示して自らの正当性を主張したものである。ここで注目したいのは、正当性の根拠として文録三年に実施された太閤検地(文禄検地)があげられていることである。

以下、内容を要約すると、①まず、検地奉行の羽柴下総守(滝川雄利)が検地のさいに緞屋年貢として四石八斗(Aでは一石九斗二合)を定めた、②緞屋たちは「地面無之」(C)、「無地高」(D・F)と農地を持っていなかった、③緞屋たちは、営業を続けるために年貢の用捨を願った。④しかし、滝川は、緞屋は他村や他国にない珍しい職で、由緒にもなるから年貢を納めるよう指示した、⑤この結果緞屋たちの独占的な特権が公認された、というのである。

以上のように、先の轆轤年貢と同様、近世中後期において文禄検地が職人の特権・由緒の根拠となる緞屋年貢負担の契機として認識されていたことが確認されるのである。

3 家系・由緒作成と関連して

最後に、貝井郡小原一色村(現北勢町)の庄屋を勤めた佐野家の文書により、一柳可遊と地域社会との関連についてみておきたい。

〔史料14〕

文禄三年八月

墨附改四拾式枚

一柳右近内

長谷川権右衛門

林 与治右衛門

本姓藤原氏天津兒家根命廿一世孫中臣御食子長子鎌子大臣末流中興宇多源氏佐々木、夫家系之譜姑以陰陽為次陽之卷者天也、陰之卷地也、天者父也、地者母也、依之以陽之卷為宇多源氏佐佐木以陰之卷為藤原氏佐野也

諡大織冠大権現 一名 鎌足

天津兒家根命廿一世孫小徳冠中臣御食子卿長子也、母大徳冠大伴久比古卿女大伴夫人是也、初懷妊之時母夢從身藤花出生遍滿日域矣在孕而十有二月哭聲於外或云言聲聞于隣里、推古天皇廿二年甲戌八月十五日於大和高市郡大原藤原第、或説^二生於常陸国鹿島郡仍鹿島神是藤氏氏神也（中略）

佐埜忠内弘綱（花押）

信長公様從畧改右系無隱可為源藤後胤者也

永録^三十一年

正月十一日

木下藤吉郎高吉

（21）

この史料は佐野家の家系（由緒書）である。内容的には、旧家の由緒によくみられる藤原氏や源氏とのかかわりを強調するものとなっている。とくに巻末の木下高吉が織田信長の系図改めを受けてこれを確認するという文言は、この史料が後世に一定の意図をもって作成されたことを示している。

しかし、ここで注目したいのは、史料の冒頭に「一柳可遊内の長谷川権右衛門と林与治右衛門の名がみられることである（この部分は異筆である）。両者については、徳川林政史研究所所蔵の旧名古屋税務監督局所蔵史料のうちの度会郡大内山村の文禄検地帳（八月一二日付）に「一柳右近内長谷川権右衛

門」、飯高郡立野村の文禄検地帳（八月九日付）に「一柳右近之内長谷川権右衛門・林与次右衛門」と、その名が見られる（拙稿a参照）。〔史料14〕の年号の文禄三年八月というのも検地の時期にあたっている。すなわち、後世における家系作成にさいして、かつて検地奉行としてこの地域とかかわりをもった一柳可遊が権威化・正統化する役割を果たしたとみられるのである。

おわりに

以上、本稿は一柳右近可遊に関する三重県内の地域史料を中心に、文禄検地前後の可遊の活動と文禄検地が後の地域社会に与えた影響についてみてきた。本稿において明らかとなったことを、以下のようにまとめておきたい。

（1）天正期、一柳可遊は三重郡内に領地をもち、文禄期には桑名城主として伊勢国内で一万九五〇〇石余の領地を支配していた。

（2）文禄三、四年当時、可遊は豊臣官僚（奉行）として朝鮮出兵にかかわり、四日市場から水主人足を動員していた。

（3）可遊が検地奉行を勤めた文禄検地は、①近世において、轆師（あるいは緦屋）などの職人の由緒・特権の根拠とされるときにも、②検地後の知行割りの前提として認識され、③さらに、検地で定められた職人の年貢は、以後の年貢賦課の基準となった。

（4）検地奉行の一柳可遊は、のちに地域の有力家が家系・由緒を作成するさいに、これを権威化・正統化する役割を果たした。以上のように、文禄検地が近世における伊勢国の地域秩序の形成・再編に大きな役割を果たしたことが指摘できるのである。

注

（1）以下の史料のうち、B・Eは三重県編集・発行『三重県史』資料編・近世1（一九九三年）四一八、五一八～五二〇頁に収録されている。

（2）徳川林政史研究所所蔵の旧名古屋税務監督局所蔵史料のうち、一志郡八田村検地帳の「一柳右近内西川友方・山本久右衛門・藤沢竜助」、同郡葉王寺村の「一柳右近内山本仁右衛門・西川友方」、同郡宮野村の「一柳右近内西川友方・山本久

右衛門」、同郡滝野川村の「一柳右近内山本久右衛門・長谷川三丞・藤沢勝助・三寺伝丞・長谷川五兵衛」、同郡矢下村の「一柳右近内西川友市斎・山本久右衛門・藤沢勝助」、度会郡柏野村の「一柳右近内山本久右衛門」、同大内山村の「一柳右近内山本仁右衛門・長谷川権右衛門・山本久右衛門・藤沢庄助」、同郡平谷村の「一柳右近内西川友方・山本久右衛門・藤沢竜介」など、一柳右近の家臣として西川友方と山本久右衛門の名がみられる(拙稿a参照)。

(3) 孤野町教育委員会編集『孤野町史』上巻(孤野町発行、一九八七年)二九七頁。

(4) 三重県編集・発行『三重県史』資料編・近世Ⅰ(注1参照)、四一八～四一九頁。

(5) 阿部猛・西村圭子編『戦国人名事典』(新人物往来社、一九八七年)、六〇九頁。

(6) 三重県編集・発行『三重県史』資料編・近世Ⅰ(注1参照)、五一六～五一七頁。

(7) 四日市市編集・発行『四日市市史』第八巻・史料編・近世Ⅰ(一九九一年)、二八三～二八四頁、拙稿d参照。

(8) 近藤全編・平岡潤校補『桑名市史』本編(桑名市教育委員会)一四〇～一四一、一四九～一五一頁、拙稿b参照。

(9) 神宮文庫所蔵文書。三重県編集・発行『三重県史』第一巻(注1参照)、三七七頁。

(10) 三重県編集・発行『三重県史』資料編・近世Ⅰ(注1参照)、三四二～三四五頁。

(11) 四日市市編集・発行『四日市市史』第一〇巻・史料編・近世Ⅲ(一九九六年)、四二二～四二三頁。

(12) 以下の記述は三重県紀勢町の小倉家文書による。小倉家文書および柏野村については、小倉裕「伊勢木地師抄」(木地師学会発行『木地師研究』第三四号、一九八八年)、同「伊勢木地師抄(二)」(『同』第三五号、一九八九年)、同「三重県渡会郡紀勢町木地師和談証文一件(一)」「(二)」(『同』第七八号、一九九二年、第八三・八四号、一九九三年、第八五・八六号、一九九三年)参照。なお、同内容の史料が他にもあることは、『三重県内における木地屋の技術及び生活伝承』(三重県文化財連盟・三重県教育委員会発行、一九六一年)、一七頁、文化財保護委員

会『無形の民俗資料・記録・第八集・木地師の習俗Ⅰ』滋賀県・三重県(一九六八年)、二五二～二五三頁など参照。

(13) 『三重県内における木地屋の技術及び生活伝承』(注12参照)、二二～二三頁。

(14) 三重県編集・発行『三重県史』資料編・近世Ⅰ(注1参照)、三八三頁。この史料については、すでに拙稿「太閤検地」(竹内誠他編『教養の日本史・第二版』、東京大学出版会、一九九五年、一四六頁)、同「伊勢国太閤検地」(地方史研究協議会編『地方史事典』、弘文堂発行、一九九七年、三八二頁)において紹介している。

(15) 徳川林政史研究所蔵旧名古屋屋税務監督局所蔵史料(注2参照)。

(16) 『三重県内における木地屋の技術及び生活伝承』(注12参照)、一三～一四頁。

(17) 『三重県内における木地屋の技術及び生活伝承』(注12参照)、一六～一七頁、文化財保護委員会『無形の民俗資料・記録・第八集・木地師の習俗Ⅰ』滋賀県・三重県(注12参照)、二五二頁。

(18) 注17に同じ。

(19) 『三重県内における木地屋の技術及び生活伝承』(注12参照)、一八頁。

(20) 安濃町史編纂委員会編集『安濃町史』資料編(安濃町発行、一九九四年)、三〇九、三二三、三二五、三三一、三三二、三三四～三三五、三三七頁。

(21) 北勢町佐野家文書。

〔追記〕史料調査にあたり、史料所蔵者の小倉裕、佐野信孝両家の方々、および三重県史編さん室の方々にお世話になった。また、成稿にさいして上野秀治氏より御助言を得た。末筆ながら謝意を表する次第である。

(平成九年九月三十日受理)

* Hiotsuyanagi Ukon Kayu in the Province of Ise: Manabu OISHI (Department of History)
(Received September 1, 1997)